

「Society of Toxicology (SOT) 学術年会派遣報告」

– Continuing Education Courses に参加して –

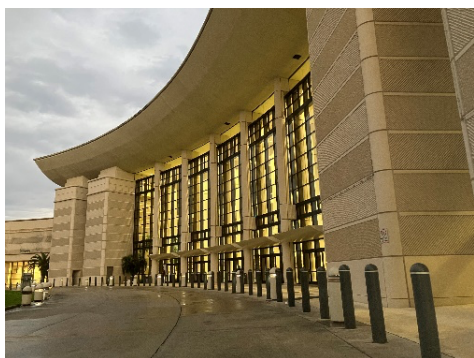
株式会社住友ファーマ 前臨床研究ユニット 栃谷 智秋

今回、日本毒性学会からの派遣として、2025 SOT Annual Meeting に参加し、教育コースを受講させていただきました。指定コースとして「Seeing Ocular Pathology: Best Practices for Ophthalmic Endpoints in Ocular Toxicity Studies」を、選択コースとして「Fit-for-Purpose Methods to Fulfill 21st-Century Chemical Risk Assessment」を受講いたしました。

指定コースでは、遺伝子治療や細胞医薬など、様々なモダリティの医薬品が眼疾患を適応として開発される中で、動物種の選定、ERG や OCT といった各種の機能的・形態的評価項目や病理評価項目の選定・デザイン、及びこれらの結果に基づく統合的評価など、非臨床でどのように安全性を評価するかについて解説されました。私自身はこれまで主に病理評価の面から、全身投与や眼内に投与される医薬品の眼への影響の評価に携わってきましたが、今回評価の全体像や、各評価項目の位置づけについて、理解を深めることができました。選択コースでは、化学物質の曝露評価やリスク特徴づけにおけるリードアークロスや PBK モデリングなどの NAMs の利用について解説されました。

本年会では、FDA や EPA などの政府機関の方々が急遽欠席となるなど混乱もあったようですが、それでもセッション講演や、ポスター発表、企業展示は数多く、議論も活発になされており、各分野を代表される方々とも質疑を通じて交流できる、よい機会となりました。なお、昨今の為替状況もあり、気になるのが参加費用でしたが、SOT 会員・非会員で大きく異なります。参加に合わせて入会を想定される場合は、12 月末までの申請が必要となるようですので、予めご用意されたほうがよろしいかと思います。

最後に、このような貴重な機会をいただきました日本毒性学会教育委員会の諸先生方、及び事務局の皆様にご心より感謝申し上げます。今回の学びも基に、今後の日本毒性学会の発展に少しでも貢献できるよう、努力いたします。



会場のオレンジカウンティ・コンベンションセンターと会場前の光景。開催地のフロリダ州オーランドは、亜熱帯ということで、3 月でも非常に温暖、湿潤で、散策は会場周辺に留まりました。